



# 傘男



しゅん

## 登場人物

---

### 主な登場人物

ガギガー（通称・傘男）

ルン（傘）（通称・不幸の傘）

ミキ...クラスメイト

ルドル...友人

明日香...妹

ロウ...弟

棒 我左羅

不幸の傘を手にとったことから石を探すアテのない旅が始まる。

あのとき、もし傘を手にしてなかったら普通の人だった。

たった一つの実験が

これからの人生を左右する

傘男と不幸の傘と、その仲間との

石探しの旅が始まった

——旅はまだ、始まったばかりだ——

## プロローグ

---

血の雨を降らせる男がいる。

いつでも傘を持ち、他人からはこう呼ばれる。

「傘男お？」

一人の高校生が言う。

ここはとある駅のホーム。不良高校生のたまり場となっている。

「そう！いつでも傘を持ってるんだけど、その傘で絡まれたら叩いたりして攻撃するんだってさ！とてつもなく強いらしいぜ！」

もう一人の高校生が答えた。

「へえー。だったらその傘を奪っちゃえば勝てんじゃね？」

「それがどうもそういうわけにはいかないらしいんだ。とにかくそいつは血を好み、そいつに関わったら死だ。」

「あれ？ガギガーまた傘持ってきたのかよお。」

「おう、ルドル！今日は雨って予報だ！オレの中で。」

ガギガーと呼ばれた男がにっこり笑って答える。

「ははっそうか。んじゃまた明日なー。」

そう言ってルドルは帰る。

「ガギガー！ガギガー！あんた周りから何て呼ばれてるか知ってる？」

ガギガーに話しかけてきたのは、なんとガギガーの傘だ。

「傘男だろ？ルン。」

ガギガーは、喋る傘をルンと呼んだ。

「私を毎日持ち歩いてるからだってさあ！」

ケタケタとルンが笑う。ガギガーをバカにしているようだ。

ガギガーが何か言おうとする前に、後ろから別の声がした。

「傘男！オレと勝負しろ！」

高校生が、ガギガーの後ろに立っていた。

くるりとガギガーは高校生の方を向く。

「へえー。よくオレが傘男ってわかったねー。」

ガギガーが感心して聞く。

「晴れの日に傘を持ってるバカはお前だけだ！」

「ギャハハハハー！バカだってさ！ガギガー！あんたバカだってさあ！」

ルンが大笑いする。

「まあ知ってて戦いを挑むなんて命知らずとしか言いようがないけどね。君、死ぬよ？」

ルンを無視してガギガーは言う。

「お前をたおせばオレの名が上がる。ぜったいに勝つ！」

高校生がパンチをしてくる。

「意気込みはいいんだけどねー。」

やれやれという感じでガギガーは戦いに応じる。

パンチを傘で叩いてはじく。

「何やってんのよガギガー！はやく血を！私に血を吸わせて！」

ルンが叫ぶ。

ガギガーはルンを無視して傘でどんどん殴る。

『くそっ！あの傘さえ奪えば...』

傘でしか攻撃をしてこないガギガーを見てとっさに高校生は考えた。そして行動に移す。

傘で殴られた瞬間、高校生は傘をつかみ、強引に奪った。

同時に、高校生の脳裏に友人との会話がよみがえる。

——「その傘を奪っちまえば勝てんじゃね？」

「それがどうもそういうわけにはいかないらしいんだ。とにかくそいつは血を好み、そいつに関わったら死だ。」

「傘を奪っても無理ってのはどういうことだよ。」

「その傘は不幸の傘だ。傘男以外が持つと、その持った奴は体のところどころが無くなって死ぬんだ。あの傘には絶対に触れちゃダメだ！」——

はっと気づいた高校生が右腕を見ると、右腕が無くなり、大量の血が溢れ出ている。

「まったくルンは...奪われるとすぐあれだ...」

ガギガーがぼそっと呟くが高校生に聞こえていない。それどころではない。

ガギガーは呆れていた。

「うわあー！右手があー！」

高校生は傘を投げ、逃げ出した。

「あいつにはルンが普通の傘としか見えていないんだぜ？ルンがあいつの右腕を喰ったら、あいつは突然右腕が消えたようにしか見えなйдろ。しかも痛いし。」

ルンを拾いながら注意する。

「フン。私を勝手に手に取った罰よ。それよりさっさと殺してあいつの血を私にちょうだい！」

ガギガーは、ハイハイと返事をして高校生に傘の先を向ける。

「戦う相手を間違えてるよ...さよなら...」

すると、逃げていた高校生が突然地面に倒れた。

「う...く...？」

高校生が呻いている。何が起こったのかわからない顔をしている。ガギガーも驚く。

「あり？エアショットを受けて生きてるの？」

「そんなことはどうでもいいんだよ！ガギガーさっさと切りきざみな！」

ルンがギャーギャー叫ぶが高校生には聞こえない。やれやれとガギガーはルン――不幸の傘――を高く振りかざした。

ルンが剣へと変わった。

高校生は死ぬまで不思議なものを見ていた。

傘男と...不幸の傘...何か特別な...力が...

そこで高校生の意識は消えた。

ガギガーはルンを持って歩きだした。

その体にも、ルンにも血一滴たりとも付いていなかった。

## 第一章 不幸の傘

---

「呪われた傘？何だそれ？」

その日は雨がたくさん降っていた。

三人の高校生が、夜も遅いのに外を歩いている。

「だからガギガー、何回も言ったろ？不幸の傘って呼ばれてる呪われた傘だよ。」

一番背の高い子がガギガーに言う。

さらに、一番背の低い子が続けてガギガーに言う。

「この傘に触れた人は皆、無残な姿になって死んでいるんだ。」

「なるほどね。そういう類の物か...」

そう言いながらガギガーは傘をまじまじと見つめる。

「ガギガー、絶対に触るなよ。」

一番背の低い子が言う。

「わかってるって。」

ガギガーが傘から目を離し、三人が帰ろうとした時だ。

「おいおい待ちなよてめえーら。」

三人の背後から声がした。

振り向くと、三人の青年がいる。

「高校生がこんな時間にうろついてちゃいけねえーなあー？」

一人の青年が言うと他の二人も、いけねえーなあー？と声をそろえた。

「おとなしく金をよこせば見逃してやんよ。」

にやりと三人の青年がほくそ笑んだ。

このケンカは実にはやく終わった。

ガギガー達の勝利だ。

「話しにならねえぜ。」

一番背の高い子がそう言った。

「さっ、帰ろうぜ。こんな傘も見たくねえーし。」

こちらは背の低い子だ。

三人が帰ろうと歩き出した。

一一待って。

「！」

ガギガーは足を止め、えっ？と言う。

「どうしたガギガー？」

背の高い子が訊く。

「今、誰か待ってって言わなかったか？」

ガギガーが、背の高い子と低い子に問う。

「え？何も聞こえなかったけど？」

「オレも...」

「確かに聞こえたんだけどなあー。」

ガギガーがおかしいなあー。と言うと、もう一回聞こえた。

――待って。

「今！聞こえなかったか？待ってって！女の子の声で！」

「おいおいガギガー。やめろよ？」

背の高い子が冗談はやめろと注意する。

「ホントだよ！嘘じゃねえーよ！」

ガギガーは懸命に訴えた。

「「...」」

背の高い子と低い子は互いに顔を見合わせてしまう。

「空耳じゃ、ないのか？」

背の低い子がおそろおそろ訊ねる。

「空耳が二度も聞こえるか？」

ガギガーが真剣な眼差しで問う。

「そりゃ、まあ、聞こえないけどもよ。そうだよな...」

最後の方は小さな声で、発した背の低い子本人にさえ聞き取り辛い大きさだった。

――私の声が聞こえるのかい？

「まただ！聞こえなかったか？」

ガギガーが二人に言う。

「聞こえないけど？」

「オレも。」

――私だよ！

「！」

そこで初めてガギガーは気づいた。

「この傘が喋ってる。」

「「...」」

また背の高い子と低い子は、顔を見合わせる。

「ガギガー、やめろよ？もし仮にだ、その傘が話しているとしても、絶対に触るなよ？」

「そうだぞ！触ったら最後、死ぬぞ！」

二人して注意する。

――私を置いて行かないで。

「...この傘...置いて行かないでくれって言ってる...」

「ガギガー！やめろ！」

「そうだ！死ぬぞ！」

二人は必死に止める。

「死ぬかどうかは、わからない。」

そう言ってガギガーは不幸の傘を手を取った。

「ヒャハハハハー！取ったね？私を取ったね？でも初めてだよ。私の声が聞こえた人間は！さあ、食ってやるよ！」

傘が大きな口をガギガーに向ける。しかし――

「なんだお前。目も口もあるのか。」

傘の言葉を見無視してガギガーが軽く言う。

「なっ！...あんた...私が見えるのかい？」

傘が驚く。

「そりゃー見えるさ！なあ？」

ガギガーが他の二人に言う。

「ガギガー、その傘と話してるのか？」

「悪いけど、その傘は普通の傘にしか見えないぜ？」

二人が恐る恐る答える。

「...そうか、二人にはこの傘の声も目も口も見えないのか...」

残念そうにガギガーが言う。

「ガギガー、もうその不幸の傘の呪いにかかっちゃったんじゃないのか？」

「いや...そうは思わないけどな...」

ガギガーが答えると同時に傘が叫ぶ。

「何だって？私が呪う？不幸の傘？ふざけるんじゃないよ！私はただ血を好むだけだよ！」

「ちょっとややこしくなるから黙っててくれない？」

ガギガーが傘に言う。

「なんだって？ちょっと」

「おそらく、オレ以外の人には、この傘の声も聞こえない、目も口も見えない。こいつが普通の傘に見えるんだ。」

傘を見無視してガギガーがまとめる。

「あんたが私の声を聞こえたり姿を見えたりするのがおかしいのよ！」

傘がギャーギャー言う。

「何？そうなのか？」

初めてガギガーは傘の言葉に興味を持った。傘は実に不愉快そうだった。怒りながら傘が教え始めた。

「そうよ！だから私も驚いてるんじゃないっ！今までに私の姿どころか、声すら聞いた人いないんだから！」

「じゃあ...オレが変なのか？」

「ふんっ！そうよ！あんたおかしいのよ！」

「...っつーか、一番おかしいのはお前だろ。」

ガギガーが傘をぶんぶん振る。

「ちょっと！目が回るからやめなさいよ！私にあんたの血をいただくのよ！もっと恐がりな



さい！」

傘は相変わらず怒っているが、ガギガーに振り回されている。

「はぁ？何でオレがたかが傘にびびんなきゃなんないの？だいたい一人で動けないお前が、もしオレに拾われてなかったら飢え死にだぞ。」

「私は物を食べないわ。ただ、人の血が好きなの！この口で人の肉を食って血をいただくの！」

「やっぱ食うんじゃねーかよ。」

「うるさいわねー。だいたいあんたねー。私をただの傘だと思ったら大間違いなんだからっ！」

「はいはいわかったわかった。喋る傘なんて珍しいもんねー。」

やれやれという感じでガギガーが答える。

「なっ」

「まあさ、変なもの同士、仲良くやろうぜ。」

傘の言葉を遮ってガギガーは言った。

傘の返答より先に、別の声がした。

「てめえーらさっきはよくもやってくれたなあ！」

先ほどけんかで勝った青年達だ。人数が増え、全員ナイフを持っている。

「死んでもらうぜ！」

「お前ら逃げろ！ここはオレが引き受ける！」

青年の一人がナイフを持って走り出したのを見て、ガギガーが友人二人に言う。

同時にガギガーは傘でそのナイフを持っている手を叩いた。

友人二人はそのすきに走り出す。

ガギガーもさっさと走って逃げようと思っていた。傘で威嚇していればナイフよりも間合いが長いので、対抗できると考えていた。

「ちょっと！私を勝手に使わないで！」

傘が怒る。

「血が好きなんだろ？たくさんやるよ！」

傘で叩きまくる。

「私が欲しいのはあんたの血よ！」

「ざけんな！傘のくせにわがまま言うな！ほれ、血だぞ。」

青年の一人の血が傘についたのを見て言う。

「...確かにあんたといたらたくさん血がもらえそうねー。」

自分についた血をペロリと舐めながら傘が言う。にやりと笑っている。

「私を使ってもいいけど、今日だけじゃなくてこれからも私に血をくれるなら使ってもいいわよ？」

「何言ってやがる。お前とは今日限りだよ。」

「そう...残念ね。でもこの人数相手にあなた一人で勝てるかしらね？私はあいつらでもあんたでも血がもらえるならどっちでもいいわ。ただ、あんたの方がたくさん血をくれそうだったんだけどねえー。」

最後に、せっかく助けてあげようと思ったのにと付け加えた。

「えっ？」

どういう意味と聞こうとしてガギガーは左腕に鋭い痛みを感じた。

ナイフが刺さっていた。

「助けてあげようってのはどういう意味だい？」

ガギガーが訊く。

「私の力を借りればこんなやつら一瞬なのよ。まあ、さっきの条件を飲むならの話しただけだね。」

やれやれと傘が言う。なぜか不服そう。それが妙に気になり、さらにナイフを左腕に刺された。

「ギャハハハハー！さっきから何独り言言ってるんだ？頭でもおかしくなったか？」

腕を刺した一人が高笑いする。

そのままガギガーを殴る。

「ぐっ。」

ガギガーは後ろにふっとばされる。確かにピンチだ。傘の言う通り今の状況では負けてしまう。こいつらは人を殺すことになんのためらいもない。きっと殺される。

「...わかったよ。条件を飲むよ...」

ぼそりとガギガーが傘に言う。

「ん？これからも私に血を与えてくれるのね？」

「ああそうするよ。どっちにしるオレはこいつらに殺されるだろうからな。もし勝てたならケンカすれば嫌でも血は与えられるしな。まあ、たかが傘にこんなこと言ってもしょうがないけどな。」

ガギガーが諦めようとしたら、傘が突然ガギガーに言う。

「私をあいつらに向けな。」

「え？」

「早くしな！」

殴った青年が走ってくる。ガギガーは言われた通りに走ってくる青年に傘を向ける。

「エアショット！」

傘が叫ぶと、その青年は後ろにふっとんだ。

「なっ！...」

ガギガーが驚いていると傘が説明し出した。

「私の能力の一つよ。空気の塊を銃の弾のようにして撃てるのよ。」

さらに傘が続ける。

「もう一つの能力がこれよ。」

すると、傘が剣に変身した。形は剣なのに重さは傘と変わらない。

「さあ！残りのやつらも切りきざみなっ！」

傘が叫ぶ。

どうやら青年達も傘が剣に変わるの見えるようだ。あまりのできごとに動けずにいた。

そこをガギガーは切ってたおす。

「血だ！血いー！」

傘が喜ぶ。

「あっ、私このままじゃ血のついた傘になっちゃうわねー。あんた何色の傘が好き？」

「は？いや...じゃあ...青？」

「青ね。はいよっ。」

血をかぶった傘はそう言うと青色に変わった。

驚いたガギガーはしばらく傘を見つめてから声に出した。

「それも、能力ってやつかい？」

「そうよ！私には5つの力があるの！エアショットでしょー、刀に変身でしょー、色の変化でしょー、それに同時に別の力が使えるのも能力の一つよ。例えば色を変えた刀とかね。」

まだ血を飲みながら傘が即座に答える。

「あと一つは？」

5つあると言いながらまだ4つしか聞いてないので訊ねる。

心なしかガギガーはこの傘が怖いと感じていたため、恐る恐るだ。こんな能力があるならどんな人間でもこの傘には敵わない。不幸の傘と呼ばれるだけはある。

「ふんっ！」

傘は怒りながら血を飲むのをやめ、こちらに振り向いてきた。

ぎくり。とガギガーの背筋が凍る。傘の口から血が滴り落ちる。その口が開く。

――喰われる！

「あんたが私の力の一部を使えるようになるのよ。ただし、私を持っている時だけだけどね！」

傘がいやいや言う。

「えっ？オレにもあんな力が？なんで？」

「何でもいいでしょうが！とにかくあんたも血まみれなんだから、血の色だけ消しなさいよ。私を持ってる時だけ消えるから。」

「そうか！お前を持てればオレの色も変えられるのか！エアショットみたいのもできるのか？」

「そうよ。...あんた名前は？」

傘が訊ねる。

「なるほどなー。じゃあこれからもこの能力を使って血を与えてやるか。オレはガギガーな。お前は？」

不思議と自分にも同じ力が宿ったとわかったからか、傘への不安感は消えていた。それは、傘が妙に人間っぽいせいかもしれない。

「私はルンよ。よろしくね、ガギガー。」

傘がガギガーに言う。

ガギガーも傘に答える。

ーよろしくな。ルン。

傘男の誕生だ。

## 第二章 ガギガーとルン

---

目の前は真っ白だ。

――これは、夢...なのか？

いや、ちがう。

夢じゃない。

シーツの白だ。

「コンッコンッ。」

気づいた瞬間、部屋のドアを叩いて鳴らす音が。そして、

「お兄ちゃん朝だよ。」

部屋の外から声がかかる。

「おう。起きてる。」

「ロウも起こしといて。」

「えー。あいつ起きてないないのかあー。わかった。お前は朝飯食ってろ。」

ガギガーはやれやれと承知した。

「うん。わかった。」

ガギガーの妹、明日香はそう答え、ガギガーの部屋の前からいなくなった。

「ロウ、起きろ。朝だぞ。ロウッ！」

ガギガーの弟ロウはとても寝起きが悪い。そのくせどこでも寝る。

ガギガーがロウを起こし始めてから十五分経ってやっとロウは起きた。

「兄ちゃんおはよう。」

ロウが目をこすりながら言う。

「ロウ遅いぞ。明日香はもう飯食ってるぞ。」

「え？姉ちゃんはえーなあー。」

ロウが驚く。

「はやく飯食え。」

最後にそう言ってガギガーは自分の部屋に戻った。

昨日のことは夢だったのかな？

あれからどうやって家に帰ったのかも覚えてない。

ぼーっとしてまだ起きてない頭を使っても答えは出ない。

そういえばあの傘は...ルンはどこに？

考えても何も出ないのでとりあえず朝食をとることにした。

「あらガギガー。昨日の傘はどうしたの？いつでも肌身離さず持ってないと大変って言ってたじゃない。」

ガギガーの母が言う。

「傘...」

「そーよー。ずっと持ってないとダメなんだー！って言ってたじゃない。」

母がガギガーの真似をして言う。

「うそー！お兄ちゃんそんなこと言ったのー？子供みたーい。」

明日香がからかう。

しかしガギガーはそんなこと聞かず自分の部屋へ走り出した。

途中でロウに会った。

「あれ？兄ちゃん。」

ガチャン。

部屋に入る。

なんで今の今まで気がつかなかったんだ？

ルンが自分の部屋にいるなら最初に気づくはずなのに。

「ガギガー！私を独りにしないという約束を忘れたのかい！」

ルンが怒る。

「私を独りにしたらガギガーのまわりの人間を不幸にしてやるって言っただろ！」

そこまで言われてやっと思い出した。

「そういやそうだった！」

「思い出したなら私を持って朝食の場へ行きな。私を持ってないと私もあんたも能力が使えないんだから。」

「ああ。そうだったな...持ち主もルンと同じ能力が使えるって力は、人間ただ一人で、ルンが認めたたった一人の人間がルンとほとんど同じ力を使えるんだったな。」

ガギガーが思い出したという感じで言う。

「そうよ。じゃあこれは覚えてる？私とその力を発動しても、その人間つまりガギガーはエアショットとかをうつためには私を持っていないと発動できないの。私を持ってないと私の力を使えないのよ。」

うん。とガギガーは頷く。

「私も同じなのよ！ガギガーが私の力の一部を使えるようになった時から、私もガギガーも、ガギガーが私を持っている時しか能力が使えないのよ。」

ルンが怒鳴る。この傘は相変わらずよく怒鳴る。そしてうるさい。よく喋るし。

しかし、ガギガーは何も言わなかった。

短い沈黙が流れた。

「そうだったのか...」

ガギガーが呟くと、ルンはふんっと鼻を鳴らした。

「まっ、私は全然気にしてないわ。大好きな血をあんたがくれるんだし。」

ガギガーはルンを持って朝食を食べに行く。

「兄ちゃん。」

朝食を食べながらロウが言う。

「何だ？」

食べ続けながらガギガーは聞き返した。

「何でその傘持ってるの？」

するとガギガーが答えるより先に母親が、くっくつと笑いながら答えた。

「ガギガーお兄ちゃんはねー、この傘を持ってないと大変なんだってー。さあ、二人とも学校に遅れるわよ。」

母親がガギガーとロウに朝食をはやく食べるよう促した。

ロウは、変な兄ちゃん。と言い、明日香は大笑いした。

母親が明日香を注意すると、だってお兄ちゃん子供みたいなんだもーん。と明日香は再び笑った。

たしかに、何も知らない人からすれば変人だろう。

しかもガギガーは、この家では父親的存在だ。はやくに父親を亡くした明日香とロウにとって、とてもケンカが強く大人っぽいガギガーは、頼れるお兄ちゃんというより、頼もしいお父さんなのだ。

「さっさと飯を食え。」

ぶすつとガギガーが言う。頬が赤く染まるのを感じた。

「ギャハハー！ガギガー、あんた愉快的な家庭で育ったものね！あんたを変人として見てるわ！」

しかしガギガーはルンを無視した。

どうせルンの声はみんなには聞こえない。ここでルンと喋ったらさらなる変人としか思われ  
ない。

ガギガーは急いで朝食を食べ、学校へ行った。

「ちょっとガギガー！もっと私をやさしく扱いなさい！」

ルンが叫ぶのを無視して、ルンを自転車に引っ掛けて学校へ向かった。

今日は晴れている。そんな中傘を持っていれば、いやでも人目をひく。

「ガギガー。お前何で傘なんか持ってるんだ？」

友人のルドルが言う。

「ああ、オレの中では今日雨が降るんだ。」

「なんだそれ？ってかお前、その傘。不幸の傘じゃねーのか？」

ルドルが驚いたようにガギガーに聞く。

「そう呼ばれてるらしい。オレの傘だけどな。」

そう言って教室に入る。

ガギガーはルンを机の横に引っ掛けた。

「学校にいる時はオレが持ってなくても我慢しろよ。」

ルンに囁く。

「いいけど、私を忘れたらまわりの人を不幸にするわよ！」

「そういや思ったんだけどよー、どうやって不幸にするの？一人で動けないのに。」

ふと思いつきガギガーが聞く。

「私は動けないなんて言ってないわよ！あんたが私と初めて会った時に勝手に決めつけたんじゃない。」

「なるほどね。まっ！忘れねえからよ。」

「なにお？」

突然ガギガーの後ろから声がした。

ガギガーが驚いて振り返るとクラスメイトのミキがいた。

「ミッ...ミキ！」

ミキを見てガギガーがかなり慌てる。

「何を忘れないの？」

小首を傾げ、もう一度ミキが同じ質問をする。

「なっ...なな...何だっけなあー。」

「とぼけないでよ！私との約束...覚えてる？」

「約束？」

「ひどい...そのことを忘れないって言ってたのかと思ってたのに！」

急にミキが泣き出した。

その時、はっとガギガーの頭にミキとの約束が浮かんだ。

「ちょっと待てよミキ。本気で言ってたの？あの約束。」

「そうよ。ガギガーは何を忘れないつもりでいたの？」

ずいっとミキがガギガーに詰め寄る。

「もっともちろんミキとの約束だよ！大きくなったら結婚しようっていう小さな頃の約束のことだよ！」

慌ててガギガーが言うと、ミキはにこりと微笑み、よかった。と言った。

「いいねえー。若かったんだねえー。あんな約束してるなんてねえ。」

放課後、帰りながらルンが言う。

ガギガーは無視を貫き通す。

生徒は家へ向かって帰っていた。

「待ちな。」

帰る途中で呼び止められる。いつもケンカばかりしているガギガーにとっては毎日のことだ。

どうやらガギガーのことを知っているらしい。

ガギガーは自転車から降り、ルンをつかんだ。

「ヒャハハハハー！血がもらえるねえ！」

ルンが叫ぶ。

しかし、敵にはルンの声が聞こえない。

ところが、遠くの少年には聞こえたらしい。

少年が走り出した。

ールン。君は今どこにいるんだ？

ガギガーと敵はにらみあった。

「傘を使うのか？」



「はやく終わらせたい。全員一気にかかってこい。」

敵は少なくとも十人はいる。

「なあにい？」

ガギガーの言葉に敵は怒る。

「武器でも何でも使え。いくぞ！」

敵はキレた。

「「殺せえー！」」

「エアショット。」

傘の先と自分の指先からエアショットを打つだけでガギガーは勝利した。

このことがより、傘男を有名にした。

たった一人の少年が、傘を持った少年が。

十人以上の不良グループに勝利した。と。

「やっと見つけたぞ！ルン！」

背後から声がした。

### 第三章 傘の正体

---

ルンの声を聞いた少年が、ガギガーの後ろに立っていた。

「まだ...傘の中にいるのかい？」

「...どういうこと！？何であいつ私を知ってるの？」

ルンはわけがわからないという声を出した。

「あるところの科学者は不思議な武器を作り出した。それは見た目はただの傘なのにまるで魔法のよ

うな攻撃がくりだせる。そう、僕の傘もそうだし、ルンもそうだ。」

少年が語り始める。

「ところがその武器を作るためには、一人の人間が傘にならなければならなかった。いや、正確には、一つの傘を作るのに、その傘の中に一人の人間を入れるのだ。」

「でもお前の傘は喋らないし目も口もないぜ？とても人間が入ってるとは思えないぜ？」

ガギガーが割って言う。

「ああ。人間が入った傘から人間を出す方法がある。エターナルストーンと呼ばれる石を傘に食べさせるのだ。ただ、それぞれの傘によって、必要な石の数が違う。さらに石を一つ食べると一つの能力を覚えられる。」

少年はここで一息おいた。

「例えば僕のこの傘は三つの力を使える。石を一つも食べていない状態だと、能力は一つもなく、今のルンのように人間が入っている傘となる。ところが、石を三つ食べさせると、中の人間は外に出れて、三つの力を使えるようになるんだ。」

「でも私は石なんて一つも食べてないわよっ！」

ルンが叫ぶ。

「ルンが今持っている五つの力は研究室で五つの石を食べさせられたからだ。ルンは十個の能力を持つから、あと五つの石を食べればいい。」

また、一息おいた。

「私は...覚えていない...何も...ただ、自分が人間で、人間の手によって傘になったのだろうと。それだけはなんとなく覚えてた...だから人間への恨みで血を好むようになったの...ガギガー、信じて。」

「そこらへんの話しをしましょう。どうしてルンはまだ傘の姿なのか。傘の中に人間がまだ入っているのはルンだけだよ。ちなみに僕の名前は棒 我左羅。君は？」

「ガギガーだ。」

ガギガーが答えると、棒は再び話し始めた。

暗く冷たい部屋。

つんと鼻をつくような薬品のにおい。

部屋はかなり蒸し暑かった。

「助けて！私は嫌！」

泣き叫びながらも無理やり運び込まれ、何やら薬を飲まされる少女が棒の目に止まった。

棒はすでに傘になっている。

今、三つ目の石を食べた。これで傘から抜け出せる。そして...

気づかないうちに自分は傘から出ていた。

さっき泣いていた少女はと、目をやるとすでに傘になり、五つ目の石を食べていた。泣きながら何か言っている。

「う...う...私は...私は知ってるの...この傘を使って...最強の武装集団をあなたたちはつくろうとしているんでしょ？私は...いや...なりたくない！」

そう叫ぶと傘は刀に変わり、科学者の手を切り落とし、残りのエターナルストーンを手に持ち透明になって逃げた。

すぐに風の力を操る傘を持つ者がそこら中に暴風を出したが泣いていた少女、ルンは見つからなかった。

ルンはそのままその機関のお尋ね者となった。

「おそらくルンはその風で飛び、石は途中で落とし、君もどこかに頭をぶつけて記憶をなくしたのだろう。僕は、君を探して連れ戻すように命令を受けたが、もちろんその気はない。ただ、石を探して、ルンを元人間にしてあげたいんだ。そして、できればルンをこんな姿にしたやつらをたおす。もちろん僕たちの様なのがたくさん敵として現れるわけだが。」

こう話し、棒がガギガーとルンの二人を見る。

つまり二人の仲間になりたいわけだ。二人の答えを待っているようだ。

「...オレはルンに任せるよ。」

「ガギガー...私は」

ルンが言い終わらないうちに誰かが現れた。

「棒よ、きさま裏切るか...」

現れた男が棒に言う。

「僕はもともとあなた方につく気はなかった。」

「なら...死あるのみだ！」

男が走ってくる。

「一人で十分。」

ガギガーが助けようとしたので棒が言う。

「君達二人の仲間だということを証明するよ。」

そう言うと棒も走り出した。

とても速い。

あっという間に敵の後ろに回り込んだ棒は、傘を刀に変え、切る。

「ガギン。」

刃物が硬い物に当たる音がした。

「棒よ...お前は確か三つの力を使うな...」

刀に変わった傘を腕で止めながら男が言う。

「なるほど...すでに二つの力を使ったなあ...ちなみにオレは二つの力を使うぜ?ふふ...はやくなる力で後ろに回り、刀に変え切るとはなあ...だが、刀に変えた瞬間、スピードは普通に戻ったぜ?別の力を一緒に使える力があれば、速いスピードのまま刀に変えて切れたのに残念だったなあ。」

にやりと男が笑い、傘で殴ろうとする。

さっとよけて棒が眩く。

「硬くなる力か...」

「んんー?違うぜ。好きな物を硬くする力だぜ。」

ずんっ。と傘で突く。

さっ。とよけたが少しだけかすった。

しかし、敵の二つ目の力はそれだけで十分だった。

「がはっ!」

棒の口から大量の血が出てきた。

「二つ目の力は内臓への攻撃だ。傘に少しでも触れると内臓へダメージが行くぜ。」

「...なるほど...」

片ひざをつきながら眩く。

「おらあ!」

敵はまた傘で攻撃してくる。

とどめをさそうとしている。

「!」

しかし敵の足が動かない。

「三つ目の力...砂だ。」

棒が男の足元に砂を出し、足をつかませたのだ。

「ほう?しかし切れないぜ?」

「やっと...体が動くようになった...」

そう言う棒は、速くなり再び敵の後ろに回り、刀に変え、突き刺そうとした。

しかし、男の体は硬く、刺さらなかった。

今や男の足元に砂はない。

早くなる力や刀に変える力を使うために砂の力が消えたためだ。

「死ねっ!」

傘で男が殴るのを棒はかわし、刀に変えた傘で切ろうとするが今度はよけられる。

「痛くないわけじゃないねえんだ。よけられるならよけさせてもらうぜ。」

今度はパンチだ。

棒がよける。

敵のパンチは岩を砕いた。

「ガギガー！助けなくていいのかい？」

二人の戦いを観戦していたルンが言う。

「一人でやると言ったんだ。必要ないだろう。」

「でもガギガー！」

「ルン...死なせはしないさ...信じるんだろ？あの男を。」

ガギガーがそう言うとルンは黙って何も喋らなくなった。

「オレも...」

ガギガーが照れくさそうにルンに言う。傘のままのくせにルンはガギガーを上目遣いで見上げた。最初に感じた妙に人間味のあるルンの行動だ。

ルンはたまにこのように人間味のある行動を起こす。

そのまま、ん？と聞く。

「お前が人間に戻れるように手伝うよ。エターナルストーンと一緒に探そう。」

ルンのことを見ずに言う。

「ガギガー」

「しかし、あいつは助けない。あいつは死なないから助けなんて必要ねえ。」

ルンが何か言おうとしたのを遮ってガギガーが言う。

「じゃあ棒と一緒に？」

ルンの言葉にガギガーはこくと頷く。

「ああ。一緒に石を探そう。そしてその武装集団をつぶす。」

「私もやるよ！」

「もちろんだ。これからもよろしくな、ルン。」

「こちらこそ。ガギガー。」

『くそっ！どうする？...』

敵の攻撃をよけながら棒は考える。

「はははははあー。いつまでも逃げてちゃオレはたおせんぞ！」

またパンチ。

今度は傘。

さらに傘。...そうか！

棒は敵をたおす方法がやっとわかった。

「もう、お前は負けるぜ？」

「ほう？ではオレも本気になろう。」

そう言い傘でついてくる。

はやい！

「なっ！...がはっ！」

大量の血を再び吐く。

「死ねっ！」

もう一度傘で突く。

「くっ！」

地面を転がりそれをよけるが、内臓へのダメージが大きく、まだうまく動けない。

「本気になれば好きな内臓へも攻撃できる。次からは心臓へ攻撃する。どんな者も三回の攻撃で死ぬ。さらにお前は他の内臓へのダメージもあるから二回で死ぬ。一回でもくれば、虫の息だろう。」

そう言って男が傘をふりあげる。

やばいと思ったガギガーがルンを握って走るが遠すぎる。

『くそっ！これが最後のチャンス...』

そう思い棒が傘を強く握り締める。

「死ねっ！」

男が傘を振り下ろす。

瞬間、ものすごい砂嵐が男をおそう。

「目くらましのつもりか！効かぬわっ！」

バシィィー——ン！

大きな音が鳴る。

砂嵐に棒の赤い血が飛び散った。

## エピローグ

---

棒の血に染まった砂嵐がやんだ。

「がっ！...バカ...な...」

別の血が地面を染める。

棒が息も絶え絶えに刀に変えた傘を、敵の心臓に刺していた。

「お前が傘で内臓へ攻撃してきた時に刀で攻撃すれば切れることに気づいたんだ。別の力を一緒に出すことはできないからな。」

棒が血を吐きながら言う。

「くそっ...やられたな...心臓への攻撃は当たってなかったか...」

そこで男は力尽きた。

すぐにガギガーは棒の手当てをした。

数日後、棒はすっかり回復した。

「ところで棒。エターナルストーンってのはどうやって見つけるんだ？」

「なあに、簡単さ。オレ達のようにルンの口とかが見えている者にしか見えず、光っている石さ。」

棒が答える。

「ガギガーみたいに傘に入れられてないのに、私の口とかが見える人ってのは何人くらいいるんだい？」

ルンが聞く。

「たぶん...ガギガーも傘に入れられてた人間だと思う。それ以外の者には見えないはずだし...」

「じゃあ、オレの傘もさがすかっ！」

楽しそうにガギガーが言う。

「科学者は記憶を消して中に入ってた人間を捨てるって噂もあるからな。」

棒が真剣に言う。

「あいつが持ってた傘はどうした？」

「真っ二つに折れば力を失うさ。」

ガギガーの問いに今度は棒が気楽に答える。

三人の果てない石探しの旅が始まった。

## あとがき

---

こんにちは。初めまして。  
しゅんです。

今までいくつもの小説を書いていき10年以上がたちます。いや。15年以上ですね。  
初めて書いたのは小学生の頃です。  
拙い文章で。いやそれは今も同じなのですが、でもなぜかストーリーだけは面白いんですよね。

昔からストーリーを作るのが好きで、将来は小説家になれたらいいなー。なんて夢を描きつつも  
趣味で書いている程度にとどめていました。

毎回書いている物語は、終わりがあってきちんとしたエンディングがありました。  
しかし今作は、続きがありむしろこれからが始まりという感じのストーリーです。  
先があるのかとおわせるストーリーを書いてみたくて書いた作品です。

これからも色々な物語を書きたいと思いますのでどうぞ応援をよろしくお願いいたします  
。